

何を残せば大震災は歴史的に捉えられるのか？

～「震災復興と文化変容－関東大震災後の横浜・東京－」参加記～

板垣貴志（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 震災資料専門員）

私は、阪神・淡路大震災のメモリアル施設である人と防災未来センターで震災資料専門員として勤務している。現在、人と防災未来センターには、市民から寄贈いただいた一次資料（アーカイブ【archive】）が約16万9千点、災害・防災に関する二次資料（ライブラリー【library】）が約3万2千点収蔵されており、日々、それら資料の保存管理や利活用に腐心している¹。ご存じの通り、阪神・淡路大震災は1995年の出来事であり、1923年に起こった関東大震災の72年後にあたる。後者は、歴史的な分析をするに十分な年月を経ているが、前者の歴史分析はまだ緒についてもいない状況で、未知数な可能性を秘めた多様な現代資料が収集されているのである。私は、出張で参加していたこともあり、震災・復興に関するどのような資料が後々歴史的に重要になっていくのか、関東大震災に関する最新の歴史研究を参照にしたいという問題関心を抱いていた。この小論も、そのような限られた視野から書いたものであることをあらかじめ断っておきたい。

「災害からの復興過程に関する歴史分析は、歴史学の人だけではできない。学際的なアプローチが必要」との主催者側の趣旨説明にもあったように、他分野にわたる研究報告が続いた。僭越ながら、それら多様な報告を災害文化の基本と言われる《自助・共助・公助》の枠組みで少々強引にまとめると、《自助》に関する報告がバラック再建過程を明らかにした田中傑氏、《共助》に関する報告が町内会に着目した北原系子氏、そのほかの方々の報告は、《公助》に関するものであったように思われる。今回の公開研究会が、《公助》に関する報告に偏っていた印象は拭えないのではないだろうか。私はなにも、《公助》に関する研究は意味がないと言うつもりは毛頭ない。人々にとっての関東大震災体験をより深くで捉えるためには、時代は異なるにしろ、同じように社会に大きなインパクトを与えた阪神・淡路大震災経験を参照にする必要もあるのではないかと考えるからである。

その一例として、阪神・淡路大震災は日本社会のあらゆる分野に教訓を残したが、とりわけ命に関わる大きな問題として、地域のコミュニティ力の重要性を人々に再認識させたことが挙げられる。大震災発生直後、倒壊

した家屋の下敷きとなり生き埋め状態になったが救出された人数は約3万5千人であった。そのうち、実に8割に当たる約2万7千人が近隣住民により救出され、警察・消防・自衛隊により救出されたのは約8千人と概算されている²。これは未曾有の危機に際して、公的機関が果たす役割（＝公助）には限界があり、地域のコミュニティが果たす役割（＝共助）の大きかったことを象徴している。むろん、自分の身は自分で守る（＝自助）ことが重要であったことは言うまでもない。同じような現象は、関東大震災でも起こったことが想定される。震災後に町内会が急増したことを明らかにした北原報告に惹かれた理由はこれである。「文化変容」を表題に掲げた公開研究会であったが、都市の形や建物の形の変容に終始していたように思う。もちろんそれも重要な点であるが、当該期の都市民衆意識や生活様式変化にまで分析が到達しているとは言えない気がした。

その要因を考えてみるに、関東大震災を歴史分析するに際しての資料的限界を因らずも露呈しているのではないか、と思うのである。つまり、関東大震災に関する比較的手軽にアクセスできる資料は、公的な記録に限られているのではないだろうか。関東大震災の震度分布図を作成した武村雅之氏は、「関東震災に関してはいろいろな人がいろいろなことを語ります。しかし資料的なオリジン聞いてもよくわからないことが多い」と指摘している³。大震災を経験した時代と社会の深部を歴史的に捉えるためには、記録に残りにくい部分こそ重要で、さらなる資料発掘を期待しているし、その必要性はあると思う。

翻って阪神・淡路大震災に関しては、何を残しておくべきなのか。私自身、いまだ確証が持てないでいる。今後は、関東大震災と阪神・淡路大震災に関する歴史研究の相互交流が不可欠であるし、その意義は大きい。今回のような意義深い公開研究会が、今後も頻繁に開催されることを強く望んでいる。

1 阪神・淡路大震災における震災と復興に関する資料収集については、全史料協による特集「阪神・淡路大震災と記録づくり」（『記録と史料』第8号、1997）および、佐々木和子「阪神・淡路大震災を未来につなぐ」（『地方史研究』299、2002）、同「アーカイブズが生まれる－災害とひとが会おうとき－」（『アーカイブズ学研究』第4号、2006）を参照されたい。

2 河田恵昭「大規模地震災害による人的被害の予測」『自然災害科学』16-1、1997

3 北原系子・寺田匡宏編『歴史・災害・人間－災害史・原論』編一 P48 2003